



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

芦名, 定道

CITATION:

芦名, 定道. あとがき. ティリッヒ研究 2000, 1: [1]

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57577>

RIGHT:

あとがき

『ティリッヒ研究』の創刊号の発行にあたり、この研究論文集ができた経緯を説明することによって、あとがきとしたい。

この論文集は発行が「現代キリスト教思想研究会」となっていることからもお分かりのように、現代キリスト教思想研究会の活動の中より生まれた研究成果である。当研究会は、京都大学文学部キリスト教学研究室においておよそ5年ほど前から行われてきた研究会を母体として、それに1998年4月より京都大学文学部宗教学と西洋哲学史の研究室から、そして同志社大学神学部からメンバーを新たに加えて開始された。研究会は、大学院生を含めた比較的若手の研究者十数名から構成されており、現代のキリスト教思想が直面する中心的な諸問題について共通のテキストを輪読し、またメンバーが各自の研究発表を行うことによって進められている。会発足の当初から継続して取り組んできているテーマは、「宗教と科学」であるが、現在は、Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress Press 1993 をテキストに研究討論が行われている。この間ティリッヒを研究テーマにしているメンバーが増えたために、1999年4月からは、「宗教と科学」というテーマと並行して、「ティリッヒ」をテーマとする研究会がスタートした。この研究論文集は、こうして現代キリスト教研究会の中に生まれた「ティリッヒ研究会」の一年間の研究成果の報告である。

現在、ティリッヒ研究は新しいティリッヒ著作集が完成し、またティリッヒの未刊行の論文が次々に全集別巻として公にされることによって、従来の研究の見直しを含めた新たな段階に進みつつある。その意味で、ティリッヒ研究も研究としての成熟期をいよいよ迎えつつあると言えきかも知れない。当研究会でも、こうした新しい研究動向を踏まえつつ、研究発表が行われてきている。

メンバーの半分は、大学院で修士論文あるいは博士論文を準備中の者であり、その他のメンバーも、これから自分の研究を本格的に展開する途上にある者であって、その意味では、本研究論文集の諸論文はいずれも、将来に向けた研究の中間報告と位置づけるべきものと言えよう。こうした諸論文による論文集を敢えて発行する理由は、一つには論文化を前提とした研究発表を行うことで研究会を活性化し、単に内輪の研究会でのみ通用する議論を超えた研究水準を目指したいということにある。幸いいずれの論文も研究会での発表と徹底した討論を経たものであり、論文集に収めても恥ずかしくない水準の論文であることは熟読いただければご了解いただけるものと思う。この論文集は不特定多数の読者に向けて企画されたものではなく、現在の日本においてそれぞれの研究との関連でティリッヒに関心のある方々に配布することを意図している。そのため、発行部数は最小限に抑え、むしろ継続した確実な発行を心がけてゆきたい。将来の夢としては、最低年一回、さらには年数回の定期的な発行が可能になればと考えている。この論文集を手にした方々から、それぞれの論文の内容に関してはもちろん、論文集の在り方に関しても、暖かいご批判とご助言がいただければ幸いである。

研究会代表

芦名 定道